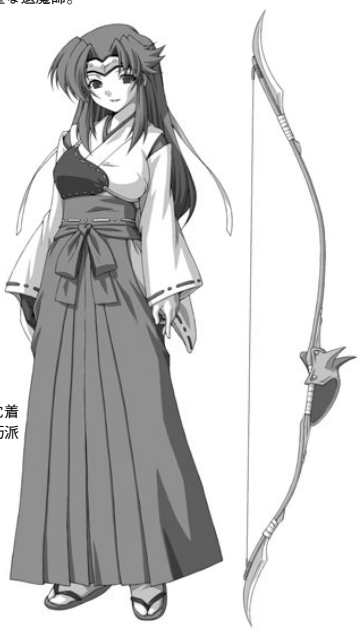
小説 大熊狸喜
挿絵 和馬村政
姦落の巫女姉妹
参
二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# 登場人物紹介

Characters

## 不動 七重（ふどう ななえ）

最強の退魔師一族「不動家」三姉妹の三女。強大な力を秘た将来有望な退魔師。



## 不動 静音（ふどう しずね）

三姉妹の長女。冷静沈着でカリスマ性を持つ技巧派退魔師。

## 不動 凛（ふどう りん）

三姉妹の次女。やや粗雑な性格で中性的な肉体派退魔師。

## 不動 沙羅（ふどう さら）

三姉妹の母。全国退魔師同盟の代表を務める。

## 色辱夢（しきじょくむ）

有ん無天凌の手下。妖艶な雰囲気を持つ。

## 偽戯夢（ぎぎむ）

色辱夢の妹。ノリは軽いが残虐な性格。

## 有ん無天凌（うむてんりょう）

数百年ぶりに復活した最強の淫魔。

プロローグ　最凶の邪淫気　008
第一章　不動沙羅　未亡人退魔師淫猥挑発　017
第二章　不動静音　淫弓矢射乳陵辱　060
第三章　不動凛　不良奴隷肛姦恥撮　103
第四章　不動七重　精液皿舐獣姦　146
第五章　不動母娘　完全敗北の淫魔出産　189
エピローグ　阿修羅　240

## ◇これまでのあらすじ◇

悪しき淫魔から人々を護る、最強の退魔師――不動家三姉妹。
神弓矢を射抜き魔を封じる長女・静音。退魔力を込めた打撃で魔を滅す次女・凛。
そして、神刀を扱い、魔を断絶する三女・七重。
ある日、退魔師同盟の本部聖地が強力淫魔・雷惨の襲撃を受け、壊滅する。三姉妹は聖地奪還に乗り込むが、逆に捕らわれてしまう。
それぞれのコンプレックスや自尊心を傷付けられる恥辱を受けながら、長女から順に目の前で犯され、処女も、退魔力も、奪われてしまう七重たち。
更に犯されて、狂わされてゆく三姉妹は、駆けつけた母・沙羅によって救われ、雷惨は祓われたのだった――。
そして数ヶ月後、厳しい修行の末、新たな退魔力を身に付けた退魔三姉妹は、廃ドーム球場に隠れる強力淫魔・紗傲を追い詰めるものの、陵辱の記憶を呼び起こされて、捕らえられてしまう。
救出にきた母も、夫の仇である強力淫魔・雅螺我闇の手に堕ち、退魔の母娘は肉親同士での相互強姦や、淫魔相手の売春婦にまで堕とされてしまう。
しかし敗北した母娘は、夫の意志が残る形見の勾玉に助けられ、遂に仇を討ったのである――。

**『第一章　不動沙羅　未亡人退魔師淫猥挑発』より**

「あの首輪は一時間ほどで…宿主の男の子たちに毒針を刺して、悶絶死させる」
「なにっ――⁉」
「助けたければ、お前自ら、あの子たちを逆レイプする事だ。女の中に射精すれば、毒針は消える……ウッフフ、楽しい遊びだろぅ？」
成熟した女淫怪は、心底楽しそうに笑っている。罪もない少年たちの命を弄ぶ、なんと卑劣な淫魔なのだろう。一方で沙羅は、子供たちを思って苦悩していた。
（この子たちと交われば、命は助かる。しかしそうすれば、彼らの退魔師としての将来も……！）
人々を護る意志を持ち、沙羅を信じて厳しい修行に耐える、真面目な少年たち。そんな純粋な彼らの未来を、自分が奪ってしまう事になる。
（しかし、命には換えられない……）
全ての戦術を奪われた今の沙羅には、苦渋の決断しか残されていなかった。立ち上がって見習いの少年たちに近付く母退魔師に、色辱夢は更に忠告をする。
「あぁそうだ、罠の事を一言でも話したら…即座に毒針を射ち出すよ。童貞レイプはあくまで、淫乱人妻の不動沙羅が行う、破廉恥行為なのだからねぇ……フフッ！」
そう笑いながら、淫魔は自分の姿を消した。普通の退魔師では見る事も感知する事もできないが、感覚を鍛えている沙羅には、頭上でコチラを監視している様子が解る。
（あくまで私の手で、彼らを辱めろという事…！）

沙羅が子供たちの肩に触れると、石のように硬直していた彼らは動き出した。
「――あっ、沙羅様！」
「い、淫魔はっ⁉」
同盟代表を護るように、囲んで周りを警戒する見習いたち。こんな、自分を護ってくれようとする少年たちは、やはり愛おしい。
（せめて…彼らの命だけでも、護らなければ……！）
沙羅は少年たちを救う為、自ら交わる決意をした。
「あ、あの淫魔はもういません。安心なさい」
「わぁ、そうなんですかっ、さすが沙羅様っ」
「お一人であんな強力な淫魔を祓われるなんて、やはり沙羅様は、素晴らしい方ですっ！」
沙羅を敬い、目標としている見習い退魔師たち。その瞳は尊敬の光でキラキラと輝き、ただ素直な感動を見せていた。その純真な眼差しは、今の沙羅には心苦しい。
（そんな瞳で見ないで下さい……私はこれから、あなたたちの退魔師としての将来を、奪うのですから…！）
辛い決心を固めた淑女の脳裏に、女淫魔の声が聞こえてくる。
『ほぅら、早く童貞を奪わないと、その子たちが死んでしまうよ』
（――！　淫魔め…！）
苦しい心を笑顔の仮面で隠し、母親退魔師は、息子のような男の子たちを見回した。

（まずは、この子たちの若い性を、刺激してあげなければ……）
「みんな…初めての淫魔との対峙、怖かったでしょう」
「は――い、いえっ僕たちは…！」
労いの言葉をかけながら、一人一人の頭を、そっと抱いてあげる。沙羅の乳房が頭を包んでしまう程、子供たちは小柄だ。巫女衣装越しとはいえ、百センチを超える豊かな乳房で包んであげると、年若い男子たちは顔中を真っ赤に染めていた。
「あ、あの……沙羅様…」
更に巨爆乳を押しつけるように、強く抱きしめる。サラサラとした短い髪の間にも指を絡め、頭皮を優しく撫でさする。
これらは全て、生前の夫に夜の床で教えてもらった、異性への愛撫の方法だ。
「悠くんも、みんなも…堂々としていて、立派でしたよ」
「は、はぃ……」
男の子たちは緊張した様子で、全身を硬直させている。返答も小声だ。
無理もない、ただでさえ体力が余っていて、異性に対する性の欲求も、無邪気で盛んな年頃。しかも修行の為に自身の中の不慣れな性欲と、毎日戦って耐えている少年たちである。
尊敬する女性に抱きしめられて、豊かな胸に顔を埋められては、石鹸にも似た女体の優しい香りを、無意識に胸いっぱい吸い込んでしまう。

更に、頭と指先という僅かな接触に対し、皮膚も敏感に反応して、プニプニとした指の感触を最大限に拾ってしまうのだ。

そして抱きしめる沙羅の腿にも、男の子たちの肉体的変化が感じられた。濃紺色の袴を押し上げ、若いペニスが硬化を教えてきたのだ。

「あら…」

「ぁわ――すっすす、すみません…！」

年上の退魔女性が気付くと、見習い少年たちは悪戯がバレた子供のように、身を縮めて俯いてしまう。

上気していた顔は耳まで真っ赤に染まり、年頃の少年独特の、強い羞恥心に責められているようだ。

（――！　かわいぃ…）

末娘よりも年下の男の子に対し、一瞬、心臓がトクンと跳ねる。僅かに強く、はしたない吐息をハっと吐いてしまう、未亡人退魔師。頬にもうっすらと紅がさしている。

（ちっ違う、これは……淫魔の、催淫液の、影響……）

自分に言い聞かせながら、しかし淑女退魔師は、自然な振るまいで次の行動に移っていた。男の子の前に跪いて、心配そうに袴を見つめる。

「これは……あなたたちの身体に、淫気の残留があるようです」

「えっ！」

「い、淫気の残留、ですかっ！」
代表の言葉に対し、少年たちは疑う様子など微塵もなく、心底驚いている。
まだ自慰行為を知らない子供たちは、淫魔の影響を受けた股間の起立を、どう扱っていいのか解らないらしい。
触れるか触れまいかという様子で、膨らんだ袴の前で、両掌を泳がせている。
そんな少年たちに、代表を務める母親退魔師は言葉をかけた。
「私が浄化してあげましょう……みんな、袴を外しなさい」
「はっ袴を、ですか…⁉」
「で、でも……」
いきなり下半身を剥き出しにしろと言われ、男の子たちは軽いパニックに見舞われている。この年代の男子というのは、ある意味では同年代の女子よりも、繊細で羞恥心が強い。
特に憧れにも似た、尊敬の念を抱いている女性に、裸になれと言われているのだ。戸惑ってしまっても仕方のない事だろう。
言った淑女退魔師も、頬を染めながら、少年たちを優しく説得する。
「恥ずかしがる事はありません。これも大切な修行の一つと、考えなさい」
「は、はぃ……」
美しい笑顔で見上げられながら説得をされると、年下の男の子は逆らえない。子供たちは恥ずかしそうに、袴の紐を解き始めた。

（……）

可愛い男の子たちが、目の前で衣服を脱いでいる。そんな光景に、ドキドキと高鳴る沙羅の心臓。男の子たち全員が袴を解くと、母親退魔師はその姿に息を呑んでしまった。

「ぁ――――！」

まだ年端もいかない子供たちなのに、男性器は大人のサイズだったからだ。

（す、すごい……！）

一人一人のペニスの、長さや太さや形は違うものの、立ち上がった勃起は臍まで届きそうな程、長大だ。男の子の平均を、遥かに上回っているだろう。

根本には一本の恥毛も生えておらず、肉全体も血行のよい、童貞特有の明るく清潔な桃色で艶めいていた。

パツパツに張った亀頭部は、勃起によって自然に、完全露出をしている。

鼓動に合わせてピクンと跳ねるその姿には、女性の心の中に、無条件で絶対の奉仕意識を沸き起こすような、不思議な存在感が既にあった。

（……それにしても、まだ子供なのに…こんな、ぉおきな…）

清潔感溢れる愛らしい男の子たちからは、想像もできないような見事な勃起。見せつけられた沙羅は、無意識に喉を鳴らしてしまう。

（こくり――ハっ、私は…！）

『淫乱人妻の沙羅の為に、あたしの魔術で大きくしてあげたよ、嬉しいだろう…ウフフ』

姿を消して観察する色辱夢は、心底楽しそうに笑っている。そして今の自分には、淫魔の言葉を否定する自信はなかった。
（…しっかりなさい、沙羅！　これは彼らの命を、救う為なのです！）
心の中で、自分を叱咤する。しかし恥ずかしそうに顔を逸らし、性器露出の羞恥に耐えている少年たちの姿を見ると、三姉妹の母である沙羅の母性が、くすぐられてしまう。
じっと男性器を見つめる女性退魔師に、男の子たちは羞恥と同時に、不安を感じ始めたようだ。
「あ、あの……沙羅様…」
「僕たちは、ドコかおかしいでしょうか…」
素直に両掌を後ろに組んで、泣きそうな、縋るような小声で訴えてくる少年たち。太くて綺麗な勃起を見た女怪魔は、淫靡な提案を囁いてきた。
『イキナリ童貞剥奪じゃあ、すぐに射精してしまってつまらないからな…まずは手でイかせてあげる事だねぇ……人妻だったのだから、慣れたモノだろう？　フフッ！』
（……っ！）
かんに障る一言を忘れない女怪異を、目の端で睨む。くすみの全くない、赤い肉棒に手を伸ばして、沙羅は左右の掌で、別々のペニスにそっと触れてみる。
……ふわり…。
（あ、熱いわ……）

同時に男の子たちは、初めて女性に触れられて、ビクンっと反応を見せた。
「んひっ――さ、沙羅様…！」
「――大丈夫です、私にまかせなさい」
太い肉棒は、まるで夏の日差しに灼かれたボンネットのように、熱くて堅い。表面は薄く脂肪が乗っていて、プニッとした弾力がある。しかしすぐ下の芯は、熱血を集めてガチガチに堅く、今にも破裂しそうな勢いだ。
熱肉を握ると、女が息を呑む。
「では、悠くんと太一くんから、浄化をして――コクン……あげます」
指を丸めてペニスを包むと、淑女退魔師の優しい勃起摩擦が始められた。僅かに触れる優しいタッチで、痛くならないようにゆっくりと。
……すりり…しゅりすり～……コシコシコシ……すりしゅり……。
敏感な肉茎を、掌全体で慈しむように、亀頭部の裏から根本まで往復愛撫する。
二人の勃起を包んでいると、それぞれの掌からは別々の形と脈動が伝わってきた。
（て、掌だけで……違いが解る…）
右手の悠は鼓動に合わせて上下に跳ねて、左手の太一は力むように細かく震えている。
二人とも強く目を閉じていて、性器を愛撫される恥ずかしさと、初めて味わう性の感覚にジっと耐えている。
周りの見習い退魔師たちも、初めて目の当たりにする女性退魔師による手淫を、目を皿

のようにして注視していた。
そんな純朴な視線に囲まれていると、それだけで女体の奥が、ジットリと重い熱を帯びてきてしまう。
（みんなの、視線が……）
体内の性熱と、性に耐える少年たちの姿に、最も大切な使命感までもがクラリと揺すられる。少しずつ息が乱れ始めた女退魔師に、淫魔は更なる恥態を要求してきた。
『周りの男の子たちが、可哀相だねぇ。そのデカいオッパイや舌だって、ダンナにさんざん、使い方を教わったのだろう？』
（胸や、舌を…！）
怪異の言葉に、焦燥する沙羅。掌での愛撫なら、まだ助けてあげるという意志が勝る。しかし胸や舌などを使っての行為は、既に性の愛撫そのものだ。子供たちの命を助ける為とはいえ、さすがにためらってしまう。
『いやなら別にいいよ。その分時間が過ぎて、その子たちの命が失われるだけ……』
確かに、その通りなのだ。なるべく早く事を進めなければ、一時間なんてアッという間に過ぎてしまう。赤髪の母退魔師は、背後に近い少年に声をかけた。
「公平（こうへい）くん、私の上着を、肩が出るくらいにずらしなさい」
「えっ――は、はいっ！」
恥ずかしそうに勃起を押さえながら、ツリ目の愛らしい少年は背後に回る。緊張しなが

ら「し、失礼します」と一声かけると、震える指で沙羅の衣服をはだけた。
両肩がツルリと剥き出しにされる。前合わせがギリギリまで大きく開くと、先端を隠したまま、Ｉカップの乳房がこぼれた。プリンのようにタプリと揺れる、白い柔乳。
「沙羅様の、おっぱぃ……」
「お、おっきぃ…！」
（こ、子供たちに、見られている……！）
年頃の少年たちの、素直な欲求を帯びた視線が突き刺さってくる。特に隠れた乳頭辺りを探るような、強い視線を感じると、衣服の下で先端の媚突が、キュウ…と絞られてゆく。
乳首を摘まれるような官能を耐えて、沙羅は少年たちに命令を下す。
「私の、胸の間に……挟みなさい。みんなも…顔に、近寄って……」
「は……はい…」
子供たちは戸惑いながらも、代表者の命じる通り、白い肌に朱いペニスを近付けてきた。ある者は深い谷間に勃起を挟み、ある少年は唇のそばに肉角を突き寄せる。
また別の見習い退魔師たちは、左右の脇の下に若角を当ててきた。
「んん――はぁ…」
両掌と、更に胸の谷間と脇の下で、若い勃起の熱さと堅さを感じさせられると、包囲された心臓がドクンっと跳ねる。
鼻先で猛る若茎からは、青い柿にも似た若々しい牡の性臭が漂ってくる。女肉を熱する

牡の香りを、鼻腔は無意識に吸い込んでしまう。
「それではみんな――んく…私の肌で、愛撫をなさい」
「は、はい――んんん！」
代表者の言葉を合図に、子供たちは腰を拙く前後させて、押しつけたペニスでの摩擦を始めた。両掌で、胸の谷間で、脇の下で、熱い勃起が強く乱雑に抽送をする。
「はんんっ――ぁあ、はぁあ……あ、あなたも…ペロ」
目の前に突き出されたペニスに舌を伸ばし、沙羅は裏側の弱点をチロチロと舐めた。
「あぅっ――さ、沙羅様っ…！」
「や、柔らかい…ですぅっ！」
女肌の柔らかさに突き動かされるように、男の子たちは必死に腰を動かす。
堅い熱肉で擦り上げられる谷間や脇の下からは、亀頭の弾力と本体の堅さが、素早い抽送で入れ替わりに伝わってくる。
皮膚が薄い場所での勃起押しつけは、くすぐったさと紙一重の性感を呼び起こし、上半身全体が薄い痺れに包まれ、肌がゾクリと灼かれた。
深い谷間に挟まれたペニスは、白い喉に向かって柔らかい乳脂肪に埋まり、分ける。
更に舌先でくすぐる勃起は性感に震えて、鈴口で透明な先走り液を膨らませていた。ほんの小さな液球なのに、匂いは強く濃厚だ。
（は、早く、出させて……この子たちを、助けなければ…！）

「んんっはぅん……はぁ、レロ――そ、そのまま出しっ――ぉ出し、なさぃ…っ！」
少年たちの性感を刺激する為、未亡人退魔師は自ら肉体を揺すり、愛撫の速度を上げて射精へと導く。両掌と脇の下、谷間と舌先で、それぞれの勃起が力んで、太さと熱と赤みを増してゆく。
――しゅっシゅルっ、ニュるヌゆるッ、たぷチゅリムちュるぷっ、チロれロつるりっ！
男の子たちはキツく目を閉じ、自らの射精欲求に忠実になる。年上女性の肉体動に合わせて腰を振り、次第に絶頂へと上り詰めてゆく。
「はぁ――きっ、気持ちぃぃ…っ！」
汗を浮かせた女体の肉間が、混ぜられた先走り液でヌルリと滑る。沙羅は心のどこかで、少年たちを導いてあげたいと、強く思う。
そして両脇を締めて、肩を窄めて乳房を寄せて、掌を強めに握って、更に舌を強く押しつけて、全ての勃起を同時に責めた。
――きュむりゅウぅ、レろしゅキュっ！
「はぁうっ――！」
その瞬間、少年たちは一斉に、性の絶頂へと導かれていた。
「さっ沙羅様ぁっ！」
「お、お身体が穢れ――はうぅっ！」
全ての箇所で勃起が跳ねて、太さと熱を増したと同時に、若い樹液が吐き出される。

――っどぴゅ――――――――――――――――――っっ、ブびゅルっどぷプるっ、ぶュううううぅぅぅっっ!!

「あぅんっ――み、みんなの…精液……あぁ…」

目の前で噴き出す精液が、沙羅の前髪や美顔、唇にかかる。谷間で溢れる樹液は、乳肌の曲線を流れて垂れた。

脇の下で吐かれた牡液は強い粘性と匂いで、巫女衣装の中にまで垂れ伸びる。両掌で達した白濁液は、手袋から上腕、耳や頭髪までをも白く染めていた。

「はぁ、はぁ……す、すごい…量…」

（しかも、僅かだけど……精液が、淫気を帯びている）

「沙羅さまっ、何か…け、穢れのようなモノが、出てゆくのが――あっ、あっ」

見習いである彼らにも、含まれている淫気は感知できたようだ。若い勃起は射精を続けたまま、更に硬度を増し始める。

『若いコが、一度や二度の射精で終わるかい…もう二～三回、イかせてあげるんだね』

（この……淫魔め…！）

見下すような、ニヤけ口調で命令を下す女淫魔。しかし今は、この子たちの命を護る事が最優先だ。沙羅は再び、少年たちに命令をした。

「まだ淫気が残っています……みんな、お互いに場所を入れ替わって、浄化しましょう」

「はい、沙羅様」

男の子たちは場所を入れ替わると、射精に向かって再び腰を振り立て始めた――。

数回の射精が終えられると、沙羅の肉体は粘性の高い精液にまみれていた。赤い頭髪や豊かな胸元には、白い牡液がタップリと粘り、糸を引き、緋袴にまで垂れ伸びている。

若い精液の濃厚な匂いと、肌に張りつく粘性で、頭と子宮が病のように恥熱を帯びていた。精液臭で蕩ろけそうな意識に、色辱夢の声が聞こえてくる。

『さぁて、準備も終わった事だし…そろそろ男の子たちを逆レイプしてもらおうかねぇ』

（そ、そうだわ、早くしなければ……この子たちの、命が…！）

沙羅は淫熱を帯びた肉体と頭で、次の行動を考えた。既に数十分は経過している。淑女はヒザ立ち姿勢のまま、自ら袴の股部分を裂いて、下半身を露出させた。

「さ、沙羅様……？」

腰の柔肉をミッチリと包む、赤い下着が露出する。女肌の柔らかさを経験したばかりの少年たちは、視線が釘付けにされていた。

沙羅は、上気しながらも冷静な笑顔を作ると、真っ赤に頬を染める男の子たちを誘う。

「ま、まだ充分とは、言えません……もっと効果的な浄化を、いたしましょう」

「で、でも、もう淫気は……」

体内の淫気は完全に浄化されているから、見習い退魔師たちは代表の行動に戸惑っている。手淫ともいえる行為を行った今、下着を見せられて更なる浄化と言われれば、誰でも

その先の性行為を想像して当たり前だ。
――半人前の自分たちが性交をしたら、退魔力が失われてしまう――。
だから少年たちは、思わず身を引いてしまう。しかしこうしている間にも時間は過ぎ、彼らの命が確実な死へと向かわされているのだ。沙羅の心にも焦りが募る。
「大丈夫です、さぁ、悠くん、いらっしゃい」
「でっでも――」
はだけた衣装からはこぼれそうな乳房が揺れて、裂けた袴からは柔肉食い込む下着が見える、跪いた清楚な淑女。大人の女性の匂うような色香に、年若い肉角は更に亀頭を天に向ける。性交を禁止されている男の子たちには、まさに生殺しだ。
少年たちの戸惑いに、ただ時間だけが浪費される。沙羅は強行に出る決意をした。
（――仕方がありません…！）
悠の手首を捕って、仰向けに寝かせる。棒のように転がされた男の子の勃起が、重たそうに、しかし堅さを誇示するように、ブルンと大きく揺れた。
力溢れるペニスの姿に、再び未亡人退魔師の喉が鳴ってしまう。
（こく……す、すごい）
こんなに立派な男性器を、これから自分の中に収める。そう思うと、命を救うという使命感とは別の、女性本能とも言うべき欲求が沸き上がってしまう。
「今、浄化してあげますからね……！」

**『第二章　不動静音　淫弓矢射乳陵辱』より**

秘処への的中を逃れてホっとした静音だが、かえって乳房陵辱の性感を、更に強く意識させられてしまう。一方で、的を外したのに楽しそうな偽戯夢。
「あっそぅそぅ、ペニス矢の精液は濃ゆ～い催淫液なのよ。アッという間に浸透して、肌をクリトリスくらいに、ビンカンにしちゃうんだから」
「なっ――⁉」
この女淫魔は、どこまで少女を貶めるのだろうか。淫核器官は、女性の殆どが自慰での絶頂時に触れる程の、最も快感を得やすい器官だ。
もし肌を、それ程までに過敏な性神経にされてしまったら、きっと衣服を身に付けただけで性の絶頂に震えるような、淫猥極まりない肉体にまで、堕とされてしまう。
「そんな、ことふ……っ！」
ただでさえ今、絶頂寸前にまで高ぶっている肉体なのだ。もし絶頂へと押し上げられてしまったらもう、淫魔を祓うどころか、こうして捕らえられたまま、ただ犯されてイかされて狂うだけの淫女へと、確実に完全転落させられてしまう。
退魔長女の焦燥にニヤける女淫魔は、新たな射手を射位に着かせた。
「は～い、では次の選手、光山学園弓道部、一年B組、石川くん、どぅぞ～」
（――っ！　ま、また……！）
細身な少年射手が弓を握り、矢を向けて構える。先の少年と同じように、卑猥な狩人の目は残酷に楽しそうに、逃げる秘裂を追っていた。

弦を引き絞り狙いを定めて、わざとジリジリと、黒髪少女の心を追い詰める。
「お、ぉねがっ……みなさん、どぅかっ…！」
静音の言葉は完全に無視され、素早く放たれた第二射。淫らの矢はなんと、ペニス挟みで嬲られる右の乳首に命中した。
――ッヒシュッ、パシャッッ！
「――っんひやあぁあっ……かふっ…！」
熱勃起責めで遊ばれる過敏な箇所に射撃を受けて、一瞬脳裏が発光する。刹那に息が止まり瞳が開かれ、背中が反らされて乳房が弾む。
「ぃイっ……か…ぁうぅ……っ！」
挟まれる乳首が白濁にまみれ、母乳がピュっピュウっと短く飛ばされた。
（ィか……され、ぇ……！）
口がパクパクと痙攣し、全身が震える。気絶と紙一重での、絶頂寸前状態。達しなかったのは自身の頑張りなどではなく、ただ膣孔に何も埋められていなかったからだ。
そして昇り詰める事のできなかった肉体は、更に強い飢餓感を子宮に積み重ねられてしまう。息が乱れて苦しくて、男性に慣らされた肉体が、太くて熱い剛肉を強く求める。
「こん…こんらは……くる、ゃふぅ…！」
（もふ、だれ…れも――この、まま……おかし、てへ……！）
弱々しくも抵抗する意志とは裏腹に、身体と心の奥底が淫らな女の叫びを上げる。

「な〜いす！　でもあとはメンドくさいからぁ、みんなで好き勝手に射的しちゃっていいよぉ☆」
敵の言葉に驚愕し、震える瞳を射位に向ける。見ると、近距離の射位には数十人の選手たちが並び、誰彼なく淫弓を構え始めていた。
――あれだけの数の淫矢を、次々と放たれる――。
無意識がそう予感すると、別々の反応を現し始める、意志と女体。
「ひっぃひゃっ……れったいにひっ――ィいやぅっ…！」
脱力した身体で、弱々しくも半狂乱のように藻掻く。動かない頭を振って手足をバタつかせ、触手の拘束と淫弓矢から、懸命に逃れようとする静音。
しかし肉体はペニスと精液を渇望し、拘束される事にまで、被虐の官能を得はじめていた。
「あらあら、凛々しい静音ちゃんとは思えない程の乱れっぷりぃ。みんな、早くイかせて素直にさせちゃおぅ。ドンドン発射〜！」
淫魔の言葉を合図に、男子たちの目が淫らに光る。無数の矢が引かれると、遂に退魔少女に向かって、大量の淫矢が射出され始めた。
――シュヒュッピヒュシュッッ！
「んぅっ――ひやぁっ…！」
六メートルの近距離で、右から左から、淫液滴るペニス矢が次々と飛来してくる。

渾身の力を込めて肢体を捻り、数本の矢をなんとか避ける静音。しかし少女を安息させる事は一瞬もなく、肉色の矢はまさしく、矢継ぎ早に襲い掛かってきた。

――ヒュシュシュッビュンシュヒュンッッ！

右から上から、太い勃起が肉体を狙い、射ち出されてくる。左に下にと身をくねらせる退魔長女は、もうどの矢を避ければいいのかさえ、考えが追いつけない。

逃げるようにくねる少女の腰は、逆に男を誘うように、濡れた粘膜を見せつけていた。

外れたペニス矢が、床に命中して次々と弾ける。途端に静音の周囲は牡独特の、濃くてイカのように生臭い、若い精液臭に覆われてゆく。

息を吸うと汚臭で肺が満たされ、更に血液から全身の細胞へと、隅々まで催淫の毒素が浸透してゆく。

「くふっくさひぃっ…ひゃめっゃめてぇっ――みなさっ……ぁううぅ…っ！」

混乱寸前の静音は、無駄な説得へと、無意識に縋ってしまっていた。止める事の許されない肉体動に息が乱れ、確実に動きが小さく遅くされてゆく。

堅固な意志は砂城のように脆く崩され、無力な幼女のようにただ涙を溢れさせる、不動家の長女。

もはや、戻る道のない追い込みから逃れる方法など、残されていなかった。

「いやっ…ひやぁっ…！」

疲労と性感で、脱力の限界を迎えた肉体が、ゆっくりと藻掻きを止めた。格段に狙いや

すくなった的の女体。震える半裸少女の前髪辺りに、更に追い込みの淫矢が命中する。
――っバシャッ！
「いぃっ――かぉっ、かほにひっ…せひぇきぃっ…！」
ペニス矢が額で弾けると、美しい黒髪が大量の白濁液で穢された。粘性の高い催淫精液は、少女の髪に染み込んで頭皮を汚染し、額から媚顔へと垂れ伸びる。
「あつ、はつひ…くさひぃ……せひぇき、ゃめてへ……！」
熱い精液をかけられた場所から、小さな痺れが起こり始める。正座の後のような媚弱な痺れは、肌と神経に確実に染みわたり、身体が絶対の性感帯へと染められてゆく。
汚粘液は更に鼻筋や頬をドロリと流れ、アゴのラインから胸の谷間へと流れ落ち、粘り着く肌を性感帯へと染め続けた。
「まぁ、エロパイ静音は顔射もお似合いなのねぇ、クスクス」
更に終わらない射法。押し寄せる勃起の淫矢は、腹部に、お尻に、脇の下に、左の乳房にと容赦なく命中し、退魔少女の肢体を白濁と催淫の精粘液まみれに穢してゆく。
――パシャットパシュッ、シュヒュッパシャビシャッッ！
顔、爆乳、谷間、脇の下、お腹、お尻頬、腿、肛門、秘処以外の箇所、全て。
絶頂寸前を彷徨わされる濡れた肉体は、ただ的にされる以外、何もできない。
次々と命中を始めたペニス矢の群れに対し、静音はもう肉体の変調を口にする事しかできなかった。

「ぁぐぅっ、おっおひりっ――わきひやぁっ……しびれへ、ひびれへぇっ――おひりっかんじちゃっ…あっんあぁっ――ムネっムレええぇぇっ！」

涙を溢れさせ、肉体を跳ねさせて、少女の桜色の肌が男性汚液で、余すところなく穢されてゆく。どこかに矢が当たる度に、子宮は更に飢餓感を強め、思考も理性も押し潰される。

牡臭を吸わされ口内に精液が流れ込むと、喉は勝手に精汁を飲み込み、心臓が喜びにドクンっと跳ねた。

（もふダメぇっ――おか、してへ……だれでも、ぃいぃっ…！）

それでも、最も飢餓を訴える粘膜には矢が当たらない。男性の勃起を渇望する女の肉体に、理性が砕かれ、思考は淫欲によって完全に塗り潰された。

退魔少女の欲望を見逃さない偽戯夢が、淫魔術を使って心に直接問いかけてくる。

『もうイきたいでしょ？　だったら自分で、エロパイ静音のおマ〇コに、勃起矢を的中させて下さいって、言うのねぇ』

（そ、ん……な……っ!?）

底なし沼だと解っている淫魔の誘いに、理性が、身体が、引きずり込まれてゆく。重石を縛りつけられた最後の理性は、水面を求めて必死に藻掻くものの、沈みゆくのを止められない。

しかもその間ペニス矢は撃たれ続け、生殺しの肉体は限界以上に追い詰められていた。

『このままだとず～っと、イけないままだよぉ？　もっとイけない矢が欲しいなら、あたしは別にイイけどねぇ……クスクス』
全身を拘束されて、両の乳首を勃起で擦られ、肌も淫液漬けにされて性感責めにされてしまい、肉体には抵抗の力さえ入らない。
武具も退魔力も失った今、女淫魔を祓うどころか、脱出する事だって、どう考えたって、絶対にできない。
――敗北以外の結末なんて、もうどこにも……ない――。
自らの肉体に心がへし折られた瞬間、少女は無意識に敗北の言葉を、心で告げていた。
（……く…くだ、さぃ……）
『聞こえな～い。もっと大きな声で、イヤらしい自分を白状したら？』
静音にはもう、屈辱的な淫魔の言葉さえ、許しと救いのお言葉にしか、聞こえない。
「くだはっ――くださいぃっ……ェロっヘロパヒしずねのっ――あっあんっ……ぉま…ホマ、○コ…にいぃっ……ボッキほぅっ……ひゃはうぅっ…しずねをっ、ヒやらひぃ、しずねのま○こにぃっ…てきちゅ…てきちゅふしてぇっ――くださひぃいいぃぃっ…！」
遂に不動家の長女は、自ら強姦をせがむ恥ずかしい要求を、口にしてしまった。そして偽戯夢は淫弓矢を構えると、退魔少女の膣孔に決定的な破滅の一撃を見舞う。
――ッットシュッ――ヅゅぷュ――んっっ！
「――っっんひゃぐぅうぅぅっ――っ！」

カリ部分の特に太いペニスで、膣孔から子宮口までを一瞬で貫かれた。
その瞬間、聖宮の飢餓感は巨大な花火のように爆裂をして、大きく反らされる細い背中。
静音は、槍のように太い光速の性感に、脳の向こうまで打ち抜かれ、激絶頂へと飛ばされてしまった。
「ひっひぃっ――ィイくっィきっますふっ……ぁんっあああぁぁぁっ――まだイくっイってへっ……シズネっ、シルレへっ――イっておりられなひぃっれすふふふっ!!」
限界以上に焦らされた女体は、全身が激しく痙攣する程の絶頂感に満たされていた。目の中が眩く乱発光し、感覚を失った両手の先まで、バラバラになる感覚。
腰は、子宮を中心に粉々に砕かれ、両足は完全に液化されてしまったかのようだ。
二つの乳首からは白い母乳が勢いよく噴き出し、周りの男たちや自らの肢体を濡らす。
そして子宮へと打ち込まれた勃起矢は、肌に命中した矢のように弾ける事はなかった。熱と太さを増して力強く震えながら、濃度と粘度の高い精液を勢いよく放つ。
――っドぐっブゅぶるるルるぶゅるっ、ゴぷどブゅルびゅ――っっ!
強烈な射精は、肉同士が密着する膣壁を穢しながら、肛門まで垂れ伸びる。膣壁は淫魔のペニス矢を愛しく抱きしめ、更に絶頂し、静音はいつまでも頂点を彷徨わされた。
「ぁは……ィい、です……しずねの、ぉ……マ〇コぉ……ぽっき、さまぁ……」
上気した頬で笑みを浮かべ、涙まで溢れさせて、討つべき淫魔のペニスに感謝の言葉を捧げる、不動家の退魔巫女。そして女淫魔の、残酷な言葉。

**『第三章　不動凛　不良奴隷肛姦恥撮』より**

「締めつけが強くなりやがった、まるでローションまみれの掌で握られてるみてーだっ！」
肛門強姦する不良は、射精に向かって抽送の速度を上げてきた。
――っづムゅるっぢゅぷぢぷっ、きゅムりュむっつぷっ！
「んイくふっ――ふん、むぐぅっ……ヒぃっ――ヒちゃふむっ！」
肉体の上下動と激しい抽送。更に異常な程の肛門性感で、退魔少女の思考能力が停止させられる。
絶頂へと追い詰められる女体は細かい痙攣を始め、剥き出しの女性器は粘膜をヒクつかせて恥蜜をこぼす。
肌に触れる感覚を失った肉体が、浮遊感に包まれると、もう凛の女体は絶頂への期待感以外、何も意識できなくされてしまう。
全ての風景が白く塗り潰されて、腸粘膜が更に勃起を締めつけた瞬間、一際強い姦入をされた。
「イく瞬間の顔、バッチリ押さえてやるぜぇっ。おらぁっ凛っ、イけようっ！」
――っっづっぷリゅウぅぅっっ！
肛門から腸の奥まで、一気に強姦肉詰めにされる。その瞬間、退魔少女の肉体は絶頂に押し上げられてしまった。
「んんんっ――っんふっ……ひゃふう、うぅ…っ！」
健康的な肌が、サァっと上気し、小さな汗を無数に散らす。脳内では官能の花火が連続

で炸裂し、仰け反る肉体がビクリっと震えた。
素早くクツワが外されると、締めつける腸粘膜に、強姦男の精液が放たれる。
「オレのスペルマだぁっ、そのケツにタップリと呑ませてやるぜぇっ！」
――っぶぢゅりゅうううぅぅっっ、ぢぶゅぶぢュぅっ、びゅっびゅっ！
「ぉ、おひりにぃっ……せぃえきひ……ぁんっ…ぃいっぱいぃ…っ」
汚らしい不良の熱い精液を、腸の最奥に放たれてしまった。体内で感じる、男性だけがくれる熱の快感に、身体も脳も歓喜して、震えが止まらない。
「へへ、ヤらしい顔で絶頂してるよ。凛のエロ顔やエロ声まで、バッチリ撮ったっす！」
達した時の、締めつける肛門や収縮する粘膜、そして絶頂の瞬間の切ない哀顔から、余韻の笑み、イき声に至るまで、勇ましい少女の恥ずかしい姿が、全て不良たちの動画や写メに、収められてしまったのだ。
そして。
「見ろよ、肛門からスペルマ、溢れさせてやがる。ざまーみろ、ギャハハッ！」
勃起が抜かれると、それだけで再び軽い絶頂へと押し上げられる。そして口を開けた肛門からは、白濁液と一緒に、退魔力の源「不動の聖力」までもが、排出させられていた。
（そ……そん、な……せい、りきぃ……）
絶頂から、緩やかに意識が戻ってくると、強い衝撃に襲われる退魔少女。そして不良たちには見えないらしい金色の勾玉は、女淫魔の手に易々と奪われてしまった。

自尊心をボロ屑のように砕かれた少女の心に、偽戯夢が直接、言葉をかけてくる。
『えへ、ホントはねぇ、聖力なんか、あなたのお腹に手を当てるだけで、簡単に奪えたのよ☆　でも凛ちゃんはこの方がさ、ずっとず～っと、イヤでしょう…クスクス』
（そ、んな……）
今更ながら、どこまでも女性を貶める淫魔の嗜好。一旦性欲を満たした保里田に持ち上げられて、凛は再び便座に座らされた。
『それにしても～、こんなゴリラにお尻を犯されてイくなんてぇ、凛ちゃんってばスっゴ～イ。淫魔のあたしだって、ゼ～ッタイ、ヤだけどなぁ。アハハハ☆』
（だ…だま……くぅ……！）
少しの反論さえ、出ない。罵りと笑いが、惚けた頭の中で反響する。凛々しかった瞳は涙を浮かべ、悔しさと悲しさと惨めさに、粉と砕かれた自尊心が踏みにじられる。
女淫魔は、涙まで浮かべる退魔巫女を楽しそうに見下ろすと、更なる恥辱を提案した。
「おマ〇コとか強姦とかの写真だけじゃあ、まだダメよ。ナマイキな凛ちゃんの、もぉ～っと惨めな、決定的な写真を撮らなくっちゃね☆」
「まだ……なに、か…する……」
偽戯夢の言葉に、恐怖で心が震え、肉体が期待に震える。そして淫敵は、貯水タンクの裏から生える触手を数本引き抜くと、妖しい筆に変化させた。
「これはねぇ、『淫魔の淫筆』っていう魔術道具なの。いちいち桶突く反抗的な女を、従

順な肉孔奴隷に躾ける、最高の筆で～す☆」
「いん、ふで…？」
淫怪の手にする魔術道具は、一目見て異常な筆だと解る。太さは習字用の筆よりも一回りほど太く、形は男性器そのものだ。
赤黒い色をしている本体は有機的に反っていて、表面には血管まで浮いている。亀頭部分の反対側が毛筆になっていて、粘性の高い、白い墨汁が糸を引いていた。
白い墨は筆から垂れ落ちると、一瞬で黒く変色をする。
偽戯夢は不良たちにウィンクを送り、魔道具の使い方の説明を始めた。
「ヘボ退魔師のリ～ンちゃん。あたしの事ぉ、『偽戯夢様』って、お・呼・び☆」
「だっ――ひくっ…だれ……が…っ！」
見下され、足の指先で秘処をこねられる。女ならではの粘着質な挑発に、退魔次女は怒りに震える。凛の反応を確かめた女淫魔は、ニヤつく男たちに振り向く。
「はい、今反抗的なナマイキを言いましたぁ。そ・こ・で」
剥き出しにされた左乳房に、魔筆でなにやら書かれ始めた。白い墨は肌に触れると、やはりすぐに黒く変色をする。乳肌には「偽戯夢様」と書かれていた。
「もう一度言うわよ。偽戯夢様って、お呼び」
「だれっ――ぁうぅ…！」
淫怪の言葉を聞かされた途端、乳房に書かれた「偽戯夢様」という言葉が、無条件な命

令として、刷り込まれてゆく。
（な、なに……いん、まの…ことば、が……!?）
淫魔に「言わされる」のではなく、完全に「偽戯夢様と呼ぶ事が当然」と、脳に刻み込まれてしまう。そして。
「は、ぃ……偽戯夢、様ぁ…」
（こんな…ことっ――でも…とう、ぜん……!?）
自身の言葉に驚愕する退魔次女。しかも強気な瞳はウットリと蕩けて、まるで飼い主を敬うペットのようだ。偽戯夢は余裕の笑みを見せ、不良たちは凛の変化に驚いていた。
「この筆で書いた命令はね、本人の脳に自分の意志として刷り込めるのよ。しかも一度書いたら、効果は一生～☆」
（なんで……すって…っ!?）
淫魔の淫筆とは、書いた者の命令を、自らの意志として脳に刷り込む、淫魔の道具だ。書かれた女性を従順な奴隷として、一生服従奉仕をさせる、まさしく悪魔の淫魔術。
「この筆で凛ちゃんの身体に淫らなラクガキをして、惨めな女の写真を撮っちゃえ～☆」
淫魔という怪異は、なぜここまで女性を貶める術を考えられるのか。まさしく、穢れ歪んだ淫欲の魔、淫魔だ。
偽戯夢の奸計に、やはり保里田が一番に乗ってきた。筆を受け取り、イヤらしい笑みで近付いてくる。

「こりゃあいいぜぇ。この筆で凛を、誰とでも寝る淫乱女にしてやるぜ、グッククク」
「ひっ――ぃやよっ…こな、いでぇ…！」
こんなもので命令されたら、自分の意志で、淫落へと堕とされてしまう。凛は必死に藻掻くものの、脱力した肉体を更に触手で拘束されていては、抵抗にすらならない。
汚れた不良の淫猥な筆がお尻の肌に触れると、もう強気だった少女は、怯える事しかできなかった。
――ペトリ…。
「――んひっ！」
「さぁて、なんて書いて欲しいのかなぁ？　なぁ、凛よぅ、ゲヘヘヘッ」
打撃少女の、許しを乞うような哀顔を笑い、男は遂に命令の筆を走らせる。
――つるり……するつる～…。
（くふっ――くすぐ…たひぃ…っ！）
微細な筆で肌をなぞられると、媚弱で身体の芯まで触れられるような、鋭い痺れで神経が撫でられる。筆でくすぐられた半裸の少女は、汗浮く肢体を官能的にくねらせる。
「できたぜぇ、お前にはお似合いな言葉だ」
凛のお尻には、「中出し専用！　強姦肉便器　不動凛」と書かれていた。しかも肛門を中心に、左右のお尻いっぱいに大きく。
そして書かれた命令は、そのまま本人の脳に伝わり、自身の意志として刷り込まれ始め

る。
「そ、んなっ違――ぁた、しは……なか、だし…せんよぅ……です…！」
（いやだっ…こんなことっ――ぁ、たし、は……ごぅかん、して…ほしぃの…！）
自分の意志が一方的に、塗り替えられてゆく。自分は犯されたい女なのだと、無条件に造り替えられてしまう。
更に、巫女衣装の右側だけを脱がされると、右の脇の下には「エロ奉仕大好き、奴隷オンナ」とまで書かれてしまった。
「あ～ら、グッドアイディ～ア！　これでもう触手を解いても、抵抗も逃げる事もないわねぇ。なんたって凛ちゃんは、エロ奴隷オンナ、だものねぇ……クスクス」
「っ――っは……はぃ…！」
自らの意志で従順な返答をさせられながら、無意識は屈辱で涙をこぼれさせる。触手を解かれた退魔少女は、縛られたように両腕を頭上で交差させ、M字開脚で便器に跨った。
カメラに向かって濡れた流し目を送り、短い袴を自らめくって、秘処を見せつける。
（こんな…ハレンチな、こと――もっと、したぃ……！）
不良のリーダーが行動を見せると、調子に乗った手下たちの手で、少女の肢体は淫語のラクガキを重ねられてゆく。
「ケケッ、じゃあオレも、『チンポ大好き　不動凛』って書いてやるっす！」
「オレたちも書くぞ、さぁて凛ちゃ～ん、なんて書いて欲しいかなぁ？」

「こ……の…っ！」
抵抗する意志はあっても、それ以上の自分の意志が、邪魔をする。そして数十分の時間をかけて、少女の肢体には多数のラクガキ文字が施されていた。
お腹や背中、腿や脇腹にまで、「強姦大歓迎！」や「精液中毒」、更に「中出し、犯り捨てＯＫ！」「タダ売り女」「乱交大好き！」など――。
まともな女性だったら、恥辱に狂わされてしまいそうな程の侮蔑的な言葉で、全身が覆われていた。しかも女淫魔は、様々な格好で羞恥の撮影を要求してくる。
「はぁ～い凛ちゃん、エロい顔、こっち向けてぇ」
「は、ぃ…」
（やめてぇっ……こんなの――もっとぉ、撮ってぇ……！）
――カシャーッ、カシャチャーッ！
便座にヒザをついてお尻を向けて、乳房と顔をカメラに向ける。自らの指で肛門を拡げて見せながら、カメラ目線で触手ペニスに舌を這わせる。
そんな恥ずかしい姿が、無数に、不良たちのケータイに収められてゆく。
「中々エロい写メが撮れたぜぇ、お前も自分の写真、見てみろよ」
「――あぁ……っ！」
見せられた画面に、凛は絶句してしまった。女性の恥処を全て、自らカメラに向けている自分。蕩けた顔で微笑み、触手ペニスに舌を這わせる自分。

まるで女以外、何もアピールするモノがない、最低の淫女でもしないような、女性から見ても目を背けたくなる、最も破廉恥な女の有様。

その姿からはもう、勇ましく不良たちを叩いてきた、嘗ての打撃少女の面影など、完全に消失していた。

（……こんな、しゃしんまで……とられて……）

女性にとって、完全な弱み。もう一生を、卑劣な男たちのオモチャにされてしまう事が、決定づけられてしまったのだ。

少女の自尊心が塵と成り果てて、もう抵抗の意志すら持てない。そして絶望に打ちひしがれる、強気だった退魔次女が、男たちの肉遊具として扱われ始めた。

「写真も充分撮ったし、とりあえず全員で、徹底的に犯しておくか」

「もぅ…もぅぃやっ――はぃ…よろこ、んで…！」

抵抗する意志が、書かれた意志に呑み込まれてゆく。そして凛は、不良たちによる集団陵辱に晒された。

タイル床の上に、身体の大きな手下、宇土山（うどやま）が仰向けで寝ころぶと、半裸の巫女少女もその上で、開脚姿勢で仰向けにされる。

「おれもぉ、お前のケツをぉ、犯してみたいんだなぁ、ウヘッウヘッ」

「やらっ――んはあぁ…！」

弱々しい拒絶を見せると、肩の後ろに「肛姦大歓迎！」と書かれ、保里田よりも太い勃

起で後孔が埋められてゆく。
更にリーダーの保里田によって、「二十四時間、勃起いつでもご自由に」と下腹部に書かれると、凛は自ら腰を突き出し、膣孔を強姦された。
――ちぷツぷっ……つゅプちゅっ！
「クックク、凛のマ〇コ、オレの勃起が犯してやったぜぇ！」
「この……ぅれ、しいぃ…！」
カケラ程も尊敬できない、最も軽蔑する男の肉を詰め込まれる。悔しさと怒りで発狂しそうなのに、自らの意志が、歓喜で埋め尽くされてゆく。
細いツリ目のずる賢い手下、常木（つねき）の長いペニスが右手に触れて、背の低いすばしっこい小男、猫川（ねこがわ）の曲がった男性器が左手に握らされる。
必死に拒絶しようとすると、肘から手首までの内側いっぱいに「誰でもドコでも、手コキいたします」と書かれてしまった。
「うっひゃあっ、お強い凛サマがぁ、オレっちのモノを握ってるよ！」
「しかも触り方が優しいなぁ、ホントはオレたちに犯して欲しくて、楯突いてたんじゃねーの？　ヒャハハハッ」
更に、身体の細い男、藻屋志（もやし）の大きく反り返った牡肉を、右の頬に押しつけられる。
唇を閉じて歯を食いしばると「フェラ人形」と書かれ、サクランボのような唇に肉茎を押し込まれた。喉まで一気に犯されて、えずくものの、舌はすぐに従順な奉仕を始める。

「んぐぅっ――んふ…ちゅうぷ…」
「もう舌を使ってるっすよ、ホントはヤリマンだったんじゃないっすかぁ？」
「オレたちの知ってる勇ましい不動凛は、バケの皮だったって事かぁ、ゲッヘハハッ」
下品な男たちに罵られ、笑われ、強要される肉交。悔しくて仕方ない、なのに――。
（ちがっ――そぅ…なのぅ……わたしは…ぇっち、だいすきな…おんなぁ……っ！）
意志が認めさせられてしまうと、もう自分でも自分の事が、解らなくされてしまった。
そして始まった、男たちの集団抽送。
下半身で前後を犯す勃起には別々に出入りされて、左右の掌でもそれぞれのタイミングでサスリ奉仕をさせられる。
更に髪を掴まれて、喉頭を突くようなイラマチオを強要されると、脳が揺さぶられて息が詰まった。
――つぷッちュっっ、キュむぷっツププっ、すりゅしュっしコシこ、くぷチュカムっ！
「んんっ――ひゃっ、ひゃげひぃっ……くるひっ――んひぃっ…すぐイっひゃっ…っ！」
腸を犯されているだけで、絶頂寸前の性感が追い詰められてゆく。それなのに両掌からも勃起の熱と堅さを教えられ、口内を苦い味と臭い性臭で満たされてしまう。
更に背後からEカップの双乳を揉まれながら、焦らされ続けた膣壁を、強く激しく肉詰めにされ、突き上げられている。
（くちも、てもぅ……おっぱいも、おしりも……ぉかされて……おかして、いただいてぇ

っ――ぅれし、ぃぃぃぃっ…！）

もう強気な少女の肉体も、意志も、不良たちの強姦による恥辱の絶頂を、無上の喜びとして甘受する事以外、何もできなかった。

「もっとほぅっ――んぷんんっ…ヅヒヅヒ、ぉかひてぇっ……！」

「ケッケケ、このインランがぁっ、この姿、ハッキリとケータイに収めてやるぜぇっ！」

少女の言葉に勢いづいて、不良たちの抽送は射精に向かって更に速められた。

――づチゅむリゅっツゅぷっ、つぷヅぷぢゅりュむっ、しゅリしこシゅっすりっ、くぷクぷっちゅぷっ！

「ぃぃぃっ――ぉかされるのっ…リンっ、だいすきなのふっ…！」

バラバラに突き込まれる肉棒で、少女の肢体が縦横に跳ね揺すられる。腸粘膜を擦られると背筋が灼かれ、子宮の入口を突かれると脳が弾けた。

両掌からの先走り粘液で、グローブと肌の間が粘り汚されて、喉の奥でも透明な液が臭い糸を引き唾液に溶ける。

乳房を揉まれ、健康的な肌は桜に染まり、球の汗がツゥ…と流れた。

「もふ、らめぇぇっ――ィイきたひっ……リンんっイきたひぃぃぃっ…っ！」

更なる絶頂を求めて、肉体の全てが浮遊感覚に包まれてゆく。そして強姦の肉が、一斉に引かれて突き込まれた。

「凛っ、お前は肉便所専用の女だっ、そぅらよっ！」

強姦肉便器
種凛
中出し専用!
精液中毒

## 『第五章　不動母娘　完全敗北の淫魔出産』より

――ドクン…ドクン…ドクン…ドクン…。

出産悦楽を経て僅かに理性が戻った途端、胎内で新たな鼓動が始まったのだ。出産後、一度も犯されていないのに、元通りに引き締まったお腹が、再び少しだけ大きくなる。

不可解な淫魔妊娠は、沙羅にも理解できなかった。

「なっなぜへ……また、にんひんん…っ！」

母退魔師の疑問に、色辱夢が応える。

「有ん無天凌様が与えたご精水は、絶対妊娠精液を超える、『完全妊娠精液』さ」

「かん、れん……にん、ひん…⁉」

そんな魔術は、文献にも載っていなかった。

「一度子宮に放たれると、永遠に何度も妊娠させる……しかも胎児は成長に精液を求めるから、母体は強烈な飢餓感で責め立てられる…それこそ発狂する程にねぇ、ウッフフ」

「くふぅっ――し、しきゅ…ふがぅ……」

炎髪淫怪の言葉通り、子宮内の魔胎児による強烈な飢餓感で、女体が責められる。同時に催淫性の淫気も発散していて、七重は絶頂寸前にまで、再び一瞬で追い詰められた。

「イいっ――ィひ、たひぃ……ポッキ、さまっ――んんっ…ほひぃ…っ！」

このままでは本当に、気が狂わされてしまう。姉に変わり、青髪の妹が言葉を続ける。

「もうあなたたちはぁ、退魔師なんかじゃありませ～ん。淫魔兵たちに犯されながら、永遠に淫魔を産み続ける、『淫魔の孕み腹』になりました。女の本懐、おっめでと～☆」

（わた、くひ……いんま、の……）

もう、ただ淫怪に犯されて、妊娠させられ、魔物を産み続ける事しかできない、淫魔の孕み腹。自分たちは、完全に負けたのだ。

そんな事実に、最後の無意識までもが、踏み砕かれてゆく。完全敗北をした退魔師母娘に、しかし女淫魔は容赦のない追い打ちをかける。

「強姦妊娠、出産しながら更に絶頂……何が女の尊厳なんだか。全く情けない、阿呆女どもだねぇ」

（なさけない、おんな……）

色辱夢の罵りが、眼鏡巫女の、心の底にまで突き刺さってくる。

「ほ～んと、でもコレでぇ、おバカな母娘でも、女の愚かな本性が身に滲みたよねぇ☆」

（これが……おん、な……）

不浄な淫魔の、屈辱的な言葉が、更に魂にまで染み込んでくる。まるで澄んだ清水にこぼされた、墨液のように。

――男性様であらせられる最強淫魔、有ん無天凌様の強姦で、無知で無能な私にも、女の本性を教えて頂けた。女にとって絶対の義務、強姦妊娠と出産まで、させて頂けた――。

そんな一方的な、服従と淫堕の感謝さえ、無条件に女体が覚え込まされてゆく。

「そうよぅ。母娘揃って、ただでさえナマイキなダメ女なんだから、強姦して中出しして下さったご主人様に、一生感謝します、くらいの謙虚さを知りなさ～い♥」

更に色辱夢は、肉台地の触手を引き抜くと、淫魔の淫筆を創り出す。そして新たな命令が、四人の肌に書き込まれた。
「沙羅は一番、静音は二番……凛は三番で、七重は四番……ウッフフ」
豊かな乳房に、勃起の熱を持った筆で、何かが書かれる。凛の陵辱を脳で追体験させられて、その筆が何か教えられていた眼鏡の妹も、文字の意味はすぐに理解させられた。
「ぃやぁう…よんばんっ…ばんごふ、なんてっ――ひあぁっ！」
(わた、くしは……ななぇっ――ちがふ……よん、ばん……っ！)
自分の名前は、「不動七重」などではなく、「淫魔様の孕み腹、番号四番」なのだと、自分の意志が書き換えられてゆく。
「さら、は……いちばん……ですぅ……」
「しず、ねは……にばん……」
「り、りんは…さん、ばんん…くぅっ……です…！」
自分の名前すら奪われてゆく女たちは、双子の淫魔に鼻で笑われる。
「フフン、名前など与えるから、人間のクセに勘違いをしてつけ上がるのさ」
「ほ～んと、母娘揃って強姦用の牝なんだから～、番号だけで、おーるおっけ～☆」
どこまでも、女性の尊厳を踏みにじり、見下す、汚れきった二人の怪異。しかも男淫魔ではない分だけ、女の心を踏みにじる淫湿な計算が、ハッキリと伝わってくる。
そして和合液が溢れる肉の台地から、様々な淫魔兵が湧き出してきた。

――ブチュギュルルッギュチャアァァ――――ッッ！

アオムシ型、蝙蝠型、カメレオン型、ヘビ型など、無数に溢れ出して、蠢いている、淫獄のような景色。淫怪の群れを眺めながら、色辱夢は七重たちに告げた。

「お前たちはこの淫魔兵たちに強姦され、子宮に精を放たれ、休む事なく妊娠出産をするのだ。永遠にな」

「ごーかん……いんひん……ぁい…」

淫惨な運命にしかし、意志も理性も、正義感も、思考力さえ破壊された七重たちは、無垢な笑顔で返答していた。

手足の拘束を解かれると、命令されるまでもなく、四つん這いのまま自ら淫魔の群れへと向かう、半裸の巫女少女たち。

そして同時に、沙羅は、塵のような理性を総動員させていた。

「……てぁしが……じゅぅに…！」

最強淫魔に犯された事で、春光のすぐ近くにまで寄せられていた。その事実だけは、唯一の暁光。

「もぅ、これしか…ぁぃ……どぅか…はるみつ、さま…どぅか…！」

何がどうなる、という確信なんか、何もない。ただ、嘗てのように、この勾玉に残された夫の強い意志の力が、自分たちに退魔力を戻してくれるかもしれない。

淫魔出産までさせられた今、もう母親退魔師には、亡き夫に縋るしか、ない。

そして沙羅は、隠していた勾玉を手に取ると、遺体に向かって渾身の力で投げた。
「わたくしたちにっ…ぉちからをっ！」
――ヒュンっっ！
「なにっ――！　くそっ沙羅めっ！」
全身で勾玉を投げると、裸の胸がタプンっと揺れる。敗北させた女の思わぬ一手に、姉淫魔も驚かされた。玉を奪おうと飛来するものの、追いつけない。
目の前の儚い、しかし縋るしかない希望。そして勾玉が、小さく光る。
――ピカァ…っ！
「はるみつ、さまぁ…！」
想いが、叶った――。
沙羅が確信をした瞬間、しかし夫の胸を貫く角が、掌に変化。春光の肉体に触れる直前、勾玉は受け止められてしまった。
「――っ⁉」
最後の希望が実現する、その直前に、奪われた。勾玉の光が消えて、愕然とする赤髪の母退魔師。玉を奪った掌が、最強怪異の元まで伸びてくる。
「これが最後の一手かはともかく……余を出し抜くなど、誰とて叶わぬ」
男淫魔は掌から勾玉を受け取ると、四人の聖力と一緒に手の中に収める。そして、強く握る。怪異の目論みを理解し、焦燥する、淫魔妊婦の母親巫女。

――めき……ぱしり……。
勾玉と一緒に、四人の退魔力の源までをも、砕き始めたのだ。涙して、哀願する沙羅。
「――っおっおねがいぃっ、やめてえぇぇっ！」
――っっバキリッ、ジャリッジャリリ……！
「あぁ……っ！」
有ん無天凌の掌から、砕かれた勾玉が、聖力が、荒い砂のようにこぼれ落ちる。今この瞬間、全ての希望も勝機も、完全に奪われ、破壊されたのだ。
そして不動の一族に、更なる絶望の楔が打ち込まれる。春光の肉体を貫く角が有機的に太さを増すと、夫の遺体は、上下真っ二つに分断されたのだ。
――ブチブチっビキリっ！
「――――‼」
二つに裂かれた春光が、ドサリと肉の台地に捨てられる。遺体とはいえ、夫の死を再び目の前で、しかも最も残酷な形で見せられて、妻退魔師の脳裏は真っ白にされる。
「……ぁなた……はるみつ、さま――ぃやあああぁぁぁぁぁぁっ‼」
脱力した身体で駆け寄ろうとしたものの、半裸の女体は淫魔兵に抱き留められ、群れの中へと引きずられる。
そして壮絶な悲しみは、淫敵による輪姦という無慈悲な陵辱に、踏みにじられ、蕩かされてゆく。

「あなたっあなたぁっ――ぁひゃっあぁああっ…お、ぉま○こっ――ぃいいぃぃ…っ！」
醜い怪異に太い勃起を押し込められた瞬間、子宮の飢餓感が増大された。敗北した悔しさも、今再び夫を奪われた悲しさも、自らの女体の性本能で、消失させられてしまう。
そして三人の娘たちも、無数の淫魔陵辱の中で、無垢な笑顔を浮かべていた。開脚立て膝で怪異に囲まれ、自ら爆乳で勃起を挟む、凛々しかった長女、孕み腹二番。
「ぺろっちゅんんっ――に、にばんのっおっぱいっ…もっとぉっ、にギってえっ!!」
仰向けに転がされ、お尻を最も高く掲げさせられた姿勢にされて、二孔を犯されながら、両掌でペニスをさする、勇ましかった次女、孕み腹三番。
「ぉおひりいぃっ――なかっなかあっ…らひ、らひてえええっ!!」
そして大柄で筋肉質な怪異たちに、前後から挟まれ犯されながら、突きつけられた牡肉を唇に含む、生真面目な眼鏡の妹、孕み腹四番。
「んちゅっんちゅうぅっ――んばうっ…よんばんん…っよんばんにぃぃっ――んあぅっ…へッチなっめぃれひをっ――っ…っ!!」
そして夫を奪われ、娘たちすら護れなかった、三姉妹の母、孕み腹一番も、自ら淫怪に脚を開き、より深い強姦をせがんでいた。
「らめなっいちばんっ――らめっおんなっれふうっ…！　ろぅかぁっ、ぉすきならけっ…ぉかっひてえええっ!!」
四人の女たちは、既に五ヶ月目の如く、再妊娠させられている。心臓の鼓動に合わせ、

蕩ける瞳が痙攣し、敗北と歓喜の涙が溢れて止まらない。
もう淫魔を祓うどころか、退魔力を取り戻す事も、淫魔妊娠を回避する事も、できない。
「んんっ――ィっイっちゃふぅっ――ナナへェっにんひんひてぇっ――ぁうぅっ――またぅみながら、またヒっちゃふうううぅぅぅっっっっっっ!!!」
退魔師の聖地、魅竹山に、敗北巫女たちの艶声が、いつまでも木霊する――。

そして敗北の日から、三日が過ぎていた。最強淫魔、有ん無天凌に襲撃され、支配された魅竹山は、完全に淫魔の天地と化し、その淫気は急速に、日本全土へと広がっている。
山の麓の街では、様々な淫魔兵や強力淫魔が跋扈し、女性たちをさらっては強姦し、射精し、新たな淫魔を出産させている。
七重たちと一緒にさらわれてきた人々も、女性は全員犯され、男性はみな憑依淫魔に取り憑かれ、人力を超えた強姦魔と化していた。
異常事態に駆けつけた各地の退魔師たちも、最強淫魔の力を受けて強化された淫怪たちとの戦闘で、確実に疲弊させられてゆく。
男性は負傷し、あるいは命を奪われ、女性退魔師たちは残らず犯され退魔力を奪われている。
人間たちとの闘いは見るまでもないのか、双子の怪異は余裕の笑みで誰かれ構わず男性退魔師の精を貪り、女たちを強姦していた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**